

宗教研究におけるフィールドワーク

松井圭介

キーワード：フィールドワーク，宗教研究，聞きとり，宗教地理学

I はじめに

宗教現象は人間における聖なるものの体験であり、人間を離れては成立しない現象である。人文・社会科学系の諸学問において、長い間宗教研究はなされてきたが、なかでも社会学や文化人類学、民俗学などの領域では、フィールドワークに基づくすぐれた研究が蓄積されてきた。岸本（1961）が「日本は宗教の実験室である」と記したように、日本の宗教的特性の一つとして宗教のシンクレティズム（習合的状況）が指摘される（島藪1987）。多様な信仰が重層的に地域に受容されてきた日本はまさに「宗教の博物館」であり、宗教地理学における好フィールドを提供する場であると考えられる（松井2003）。

しかしながら地理学は、フィールド科学を標榜するものの、宗教研究における研究蓄積は他の学問と比して豊富とはいえず、宗教にかかわるフィールドワーク方法論についても、十分な検討がなされているとはいえない。そこで本研究では、宗教研究におけるフィールドワークの方法・実践・課題について、関連諸学（宗教学、社会学、民俗学）における既往研究の解題を通して整理するとともに、筆者自身のフィールドワーク経験を通して、宗教地理学におけるフィールドワークの技法について検討することを目的とする。なお、宗教地理学とは、宗教というプリズムを通して、場所と人間とのかかわりを明らかにすることと仮設的に定

義する（松井2013a）。

本稿では以下の順に述べる。II章では、関連諸科学（宗教学・社会学・民俗学）における宗教のフィールドワークについて、方法論的にかかわる文献の解題を通して検討する。III章では、筆者自身のフィールドワークの経験をもとに、宗教地理学におけるフィールドワークの技法について、検討する。IV章ではまとめとして、筆者自身の研究をふりかえりつつ、フィールドワークの意義について考察したい。

II 関連諸科学における宗教研究のフィールドワーク

II-1 宗教学の視点

本節では、宗教学におけるフィールドワークの事例として、池上（1996）の解題を通して、フィールドワーク方法論にかかわる議論を整理する。

1) フィールドワークの定義と対象

池上はフィールドワークについて、以下のよう

に定義している。

（広い意味では、遠方の図書館に足を運んで文献を検索したり、寺社や教団を訪問して出版物を入手したり、宗教遺跡や聖者ゆかりの地を訪ね歩くことなども、実地調査といえるかもしれない。しかし、ここでは）現実

を通して、かなり長期にわたって具体的な宗教の現場と向かい合う方法に限って、フィールドワークと呼ぶことにする（池上1996：126）。

宗教学においては従来、フィールドワークに基づく研究は傍流とされ、理論的研究と比して、実証的に宗教現象の様態を解明するスタイルの研究は、軽視される傾向が強かった。この理由として、宗教学が人類史の総体として宗教史全体を扱うのに対して、現代という断面から宗教理解を迫るフィールドワークはその有効性に限定があると考えられたことも一端である。

池上によれば、フィールドワークの方法が適用できる宗教研究の分野は現代の宗教現象が中心であり、その主要領域としては次の3つが考えられる（池上1996：126-127）。

- (1) 明確な所属意識をもったメンバーによって活発な宗教活動が展開されている組織的宗教の研究。例）新宗教教団の実態解明
- (2) すでに長い歴史のなかで社会に定着し、洗練された教義・思想の蓄積をもつ一方で、一般の人々の生活に根ざした教義的なかかわりが広くみられる宗教現象。例）既成宗教（神仏基など）の祭典や活動に人びとがいかにかかわっているか。
- (3) 制度的・教典的宗教とは無関係か、あるいはほとんど関係をもたずに、生活習俗や年中行事のなかに組み込まれた宗教的諸現象の研究。例）民俗学的な研究；習俗・農耕儀礼・葬送慣行など。

宗教学におけるフィールドワークは、いずれも参与観察、もしくは聞きとりを主体とする調査スタイルであり、各種の信仰実践やその体系（教義・教典・儀礼など）と人々の生活とのかかわりから宗教現象にアプローチする研究において有効性をもつものといえよう。

2) フィールドワークに何が必要か

宗教学のフィールドワーカーにとって必要条件は何か。池上はここで次の2点を指摘する。第一

に研究者としての能力であり、第二に共感的視点と批判性のバランスをもつことである。

(1) 研究者としての能力：

学問的文脈のなかに位置づける能力

研究者としての能力とは、約言すれば、研究成果を学問的文脈のなかに位置づける力である。そもそもフィールド調査の前提として、当該宗教そのものに対する理解が必要である。そのうえで、調査対象における宗教現象がどのような意味を持ち、どこに特徴が見出せるのか、宗教学の学問的基盤なしには、理解することは不可能である。

制度的宗教の側が提示する教義・教典の内容や、その思想史的背景などへの理解が必要になる。（少なくとも）熱心に活動している一般信者と同程度の知識をもつことは必要だろう。そのためには、まず教団の刊行物や教典類を入手したり、聖職者たちの具体的説教内容などを多く集めること、次いでその内容を、ある程度の批判的視点をもって学問的文脈のなかに位置づける作業が必要になる。そこでは当然、宗教史や比較宗教学に関する体系的な知識が要求される（池上1996：137）。

フィールドワークにより宗教現象を正しく理解するためには、信徒や地域住民との長期にわたる個人的な交流が必要となる。そこには調査者と被調査者とのあいだの信頼関係が前提となる。

研究の初期には何らかの仮説に従って質問項目を立ててみるのもよいが、こうした当初の仮説は具体的な現場では往々にして崩れてしまう。むしろ研究者自身が、多くの人々とのさまざまな対話や観察のなかから、重要な課題に少しずつ気づくという場合が多い。系統的な質問項目に沿って有効な証言や資料が集まりだすのは、ある程度調査が進んだ時点からになる。そうした段階では、配票による質問調査などによって数量的な展望を得る方法も、一定の有効性をもつ。また、現象を全体的に把握するためには、熱心な信者だけでなく、そこを離脱したり批判的な見解を抱く人々の意見

を聞くことも必要になってくる（池上1996：137）。

宗教学の研究スタイルは必ずしも演繹型の仮説検証スタイルとは限らない。とくにフィールドワークに基づく研究は、帰納法的アプローチが求められる。その際には長期的な観察とフィールドの人びととのコミュニケーション能力が必要である。具体的な調査方法は、事例に応じてさまざまであるが、参与観察をしながら現象の理解を深めていき、ある程度の方向性が定まってから、調査票を用いた半構造化インタビューといった手法が用いられるといえよう。

（2）バランス感覚：

共感的視点と批判性のバランス

宗教学におけるフィールドワーカーに求められる能力の二点目は、共感的視点と批判性のバランスである。このことは、宗教を対象とするフィールドワークにおいて学問を問わず、共通して指摘される能力であり、同時に宗教のフィールドワークの難しさでもある。研究対象に対して共感的に寄り添って理解する姿勢は、宗教のフィールドワークを成功させるために重要な要素である。信仰の外部にいる人間（調査者）にとって、内部の世界は奇異に、また時として理解を超える対象としてまなざされることも少なくない。調査者がこうした態度で調査に臨むとき、必要な情報を得ることは難しいであろう。

一方で信仰者に寄り添いすぎることによる危険性も看過できない。フィールドワークにおいて、自らが調査対象の教団に入信し、内部の側にはいって調査を行うケースもあるが、それによって研究対象を客観視できなくなるならば、研究自体の価値を喪失してしまう。共感的に対象に接しつつ、客観的・批判的に対象をみるバランス感覚こそが重要である。

（調査対象者である）人間が救いを求め宗教的に生きることに対する真摯な問いかけと、鋭敏な感受性が要求される。こうした共感的視点の一方では、信仰者と

の一定の距離をおいた批判的視点も大切になる。とくに現象の特性を宗教史や比較宗教学の問題へと体系的に位置づける作業では、特殊性のなかに埋没しない広い視野が求められる。この共感性と批判性のバランスは、実際のフィールドワークでは、多くの研究者が苦しみジレンマとなる。とくに洗礼や入会儀礼などによって会員資格が厳密に規定されている教団の調査では、研究者が内部の信者であるか外部者であるかによって、人々の対応に決定的な差が生じてくることは避けられない。有効なフィールドワークを実現するには、信者でなければならないのか、あるいは信者であってはならないのか（池上1996：139-140）。

（3）フィールドワークの難しさ：

資料の吟味とポジショナリティ

このような対象へのアプローチの難しさに加えて、フィールドワークで得られた資料の吟味にも注意が必要である。とくに聞きとり調査の場合、最初に出会った（親切に対応してくれた）話者に強いシンパシーを感じる事が少なくない。研究の初動段階ではとくに、特定の話者により一定のイメージ（第一印象）が形成されやすく、研究上のバイアスにもなりかねない。聞きとり調査の際には、話者が組織内でどのような地位にあり、どの立場から語っているのか、注意深く話を聞く必要がある。

フィールドワークに基づく研究に対してしばしば提起される批判は、資料選択の基準があいまいで、引用される事例が恣意的にすぎる、というものである。短期間の実地調査の場合、調査者は現場の第一印象の強烈さに引きずられて、その人々が集団内に占める位置や役割に対する反省を欠いてしまうことがある。調査研究において活用される事例とは、それを主体的に理解しようとする研究者自身の視点とともに、一定の系統性をもって収集された資料の全体像を背後に踏まえるべきであって、たまたま出会った人物から聞いた「面白い話」の寄せ集めであってはならない（池上1996：138）。

調査対象への共感性があまりに強く批判精神を欠くとき、研究者の発言や論文は特定の宗教や教派の宣伝と等しいものになってしまう。研究者自身が情報発信者であることへの自覚的反省が求められる。一方、はじめから研究対象を非難し、その虚構性を暴こうとする態度は、少なくとも宗教学的なフィールドワークのとるところではない。フィールドに入る際には、自分の立場や目的を明確に述べて、相手の了解を得ることが望ましい。身分を偽って「潜伏」調査するという方法もありうるが、長い目でみれば、正面から入って、時間をかけた人格的な交わりによって相互理解を深めるほうが、豊かな身を結ぶことが多い(池上1996: 140-141)。

当事者たちとの親交が深まるなかで、各種の祭典や秘儀への参加を許される機会も出てくる。また、信仰者のプライバシーにかかわるような個人的心情や、救済の体験談を聞けることもある。これらは研究成果の発表に際して、当事者に迷惑のかからない配慮が必要になる。苦労して入手した記録ほど、公表が難しいという場合も多い。得られた成果を協力者に還元する努力も必要である。フィールドワークは略奪ではなく、相互の人格的交流の上に成り立つ営みであるという原則を忘れてはならない(池上1996: 141)。

研究と信仰との境界線があいまいになるとき、「ミイラ取りがミイラになる」危険性が高くなる。いかにして研究者としての立場を保ちつつ、対象と適当な距離を測っていくか、またいかにして被調査者のプライバシーの保護に留意していくか、宗教のフィールドワークにとって、避けることのできない課題であるといえる。

II-2 宗教社会学の視点

本節では、井上ほか(1986)および磯岡(1994)を手掛かりとして、社会学(宗教社会学)におけるフィールドワークの方法について整理する。

1) フィールドワークの定義と対象：社会調査としての宗教調査

宗教学と比較して、社会科学的な手法から宗教に分析的にアプローチする視点は、社会学の一つの特徴である。社会現象としての宗教のフィールドワークを行う際に留意すべき点として磯岡(1994)は、「既存の理論的仮説を検証、または統計的な推論を下すといった科学的な方法によらねばならない」と述べたうえで、「データの収集者は、社会現象を担う人間の生活の社会的現実と直接接触することが必要である。分析方法としては、統計的方法と事例研究法(モノグラフ法)に大別されるが、その関係はどちらがすぐれているといったものではなく、相互補完的である。調査を位置づける理論的構図や作業仮説の設定がまず必要であり、その意味で、調査主体は研究者や研究機関、あるいは社会調査を十分に会得したものであるべき」だと主張する(磯岡1994: 199)。社会現象としての宗教をフィールドワークする際、調査対象としては、以下の3つのレベルがある(井上1986: 166)。

- (1) 教団の創始者・沿革・教勢・教義・儀礼・実践・組織・施設等について明らかにする教団(中央)レベルの調査。
- (2) 地域社会における当該宗教(集団)の社会的位置と機能、組織と活動、他の宗教(集団)または社会組織との連関、地域での信者の信仰生活等について明らかにする地域社会レベルの調査。
- (3) 信者個人の入信(回心)過程、活動状況、宗教意識等について明らかにする個人レベルでの調査。

2) フィールドワークの方法

統計的な解析をするにせよ、モノグラフ的な事例を収集するにせよ、データ収集の具体的方法は共通する。具体的には大きく文献収集、観察法、質問調査、の3つに大別される(磯岡1994: 200-204)。

(1) 文献収集

もっとも基本的な調査方法であり、あらゆる調査の前提となる。特定の教団を対象とした場合、当該教団が発行する教典、教義書、教祖伝、教団史、機関誌のパンフレットや、研究者・ジャーナリストによる既存の研究報告などが含まれる。

(2) 観察法

調査者自身の主として視覚によって調査対象を直接観察し、調査対象のデータを引き出そうとする方法で、主に次の二つがある。

1 非参与観察法

調査者が調査対象の外側にいて、ありのままに直接観察する方法である。調査者は信仰者の宗教的行為を価値中立的な立場からできるだけ客観的に観察しようとする。研究対象を公平な尺度で測定し、データを客観的に処理するための基本的な方法である。教団や信者から距離をおいて客観的な視点から観察するので、この方法は宗教の外在的理解になりやすい。しかし信仰者の心情の内実や儀礼等の奥深い内容の把握ができにくいというデメリットもある。

2 参与観察法

調査者が調査対象集団の中に入り込み、対象者の行動に参加しながら時間をかけて内側からありのままの姿を観察する方法である。教団のもつ奥深い内容を正確かつ詳細にとらえるためには、適した方法、とくに閉鎖性の強い教団の場合には威力を発揮する。教団や信者の内側から観察するので、宗教の内在的理解がしやすい。反面、参与技術の問題や、このような観察が対象への感情的没入に陥る危険性などの課題もある。

(3) 質問調査

対象者に口頭あるいは文章を用いて質問して調査する方法で、以下のような方法がある。

- 1 個人面接法（構造化／半構造化面接法）
- 2 配布回収法（留置法）
- 3 郵送法
- 4 託送法（教団や教会等の組織を利用して調査票を配布・回収）
- 5 集合調査法

6 電話法（インターネット法）

3) フィールドワークの手順と実際

社会調査としての宗教調査を考えると、調査の手順は、「計画・準備、現地調査、結果」の処理となる（井上ほか1986：170-172）。

(1) 調査計画

1 学問的・理論的な側面：問題の決定と仮説の構成および、それに見合った調査対象と調査法の選定にあたる。調査されるべき問題点が現地調査に先立って決められていることがまず必要である。その上で一定の作業仮説をつくりそれに沿って具体的な調査項目が構想される必要がある。ただしすべての社会調査が仮説検証的であるわけではない。

2 手段的・現実的側面：「人・金・時間」の制約である。調査には現実的な制約がつきまとう。調査資金の多寡、調査に割くことのできる時間、調査者の能力、などさまざまな制約があり、そうした制約のなかで、現実的な調査計画を立てる必要がある。

(2) 現地調査

研究目的に適した調査対象を選択する。その宗教を対象とするのか、その宗教のどのレベルに焦点を当てて調査をするのか、教団か地域か個人か、もし地域ならばフィールドとしてどの地域を選定するのか、など調査対象を限定する一連の手順を踏む必要がある。その際に「人・金・時間」によって制約されるだけでなく、教団の承諾が得られるか否かにも大きく制約される。大切なことは手持ちの、あるいは調達可能な資源にあわせて等身大の調査計画を作成することである。

フィールドに出るにあたって、調査票の作成、被調査者に対する協力の依頼（挨拶状の送付）、地域社会に関する基礎的データの収集は重要である。実際のフィールドワークでは臨機応変に質問する。調査票にこだわらないことも必要である。多くの調査経験を重ねることこそ、よい調査への最良の道である。

4) フィールドワークの難しさ

一般の社会調査と比較して宗教のフィールドワークの難しさとして、次の2点が考えられる。第一に宗教活動の源泉である信仰といった内面世界に触れてそこからデータを引き出すことの難しさ、第二に対象者側から調査への理解と協力を得ることの難しさの二つである(磯岡1994:205-208)。

(1) 内面世界を扱うことの難しさ

個人の回心の状況、入信の効果、人生観や信条といった内面世界は、個人々による内容の多様性もさることながら、被調査者が語る世界が調査者の日常的常識では理解できないほど異なる場合が少なくない。調査者は被調査者を共感的あるいは感情移入的に理解しようとする必要がある。そのために不可欠な方法は自由面接法であり、ある程度長期の参与観察をすべきである。被調査者を単なる情報供給装置としてみるのではなく、人格的なふれあいを通して暖かい信頼関係(ラポール)を醸成できるように努力する必要がある。

(2) 対象者側からの理解と協力を得ること

教団によっては、調査を拒否するケースも多い。また調査の協力は得られても、研究結果を発表する段階で教団側からクレームがでることがある。調査開始から結果公表に至るまでのプロセスにおいて、調査者は常に誠意をもって調査の学問的意義や目的・方法を説明し、教団側の同意を得るようにすべきである。

調査は、実証的研究においては最も重要なデータ収集のプロセスであるが、対象者側にとっては、有害ではあっても、何のメリットもない「面倒なこと」であるかもしれない。調査者の側でも、これまで、良質のデータを採ることを優先させ、調査される側の心持ちやプライバシーを二の次に考えていた側面がある。調査者と被調査者とは対等であることが基本。調査という行為は、本来的にインフォーマントからの情報の収奪という面をもつ。それだけにインフォーマント側の、調査方法についての同意や結果公表の承認が不可欠である。またどのような形にせ

よ、研究成果はインフォーマント側に還元されることが望ましい。

これらの点については、先述した池上の指摘と合致する。

II-3 民俗学・民間信仰研究の視点

本節では、圭室ほか(1987)に所収された論文を手掛かりに、民俗学・民間信仰研究にかかわるフィールドワークの方法論について整理する。

1) フィールドワークの心構えと対象

民俗学の場合、宗教学や社会学以上にフィールドワークが自明の調査方法であり、その重要度も高い。したがって民俗調査法にかかわる研究蓄積は膨大にあり、フィールドワークの技法についても成熟した議論がなされている(上野ほか1987; 圭室ほか1987など)。民俗学のフィールドワークの場合、対象となる主体が人間であることが重要である。調査に際して、文献や史料、あるいは教典類を無視することはできないが、聞きとりが基本となり、聞きとりで得られたデータを文献や史料そして教典類を利用して肉付けしていくことになる。

フィールドワークに入るためには、関係者の了解をとったうえで、調査に臨むことが必要である。トラブルを避けるためにも、できるだけ複数の関係者に挨拶をして、了解を取りつけておくことが望ましい(平野ほか1987:2)。

一対一の場合、相手の了解をとりつけければ問題なく調査に入ることができるが、講や祭りなど、集団の場合に臨んだ場合、誰に了解をとってその集まりに参加させてもらうかが問題となる。一般には、指導的な立場にある人をできるだけ早く探し出して、調査の趣意を説明して了解を取りつけることが必要であるが、ときに責任者一人だけの了解を取りつけても、調査者の位置が変わると、調査の趣意を理解していない人たちからクレームがつくことがある(平野ほか1987:24)。

聞きとりをする際にも、被調査者に応じて留意すべき点がある。

宗教者の場合、聞きとりには一層の注意が必要である。民間宗教者の場合、宗教的行為を神との交流と確信しており、単なる民族事象として扱うと心証を損なう恐れがある。また教団・教派に所属する宗教者の場合、組織宗教の一員として回答には制約があることもある(平野ほか1987:3)。

被調査者の心境をよく理解し、相手の考え方に同調して対応しないと、相手の方もこちら側に気を許して質問に十分に答えてくれるようにならない。一方、教団・教派に所属する宗教者の場合、教団・教派で定めた基本様式を尊重しながら、発話内容について客観的に観察し、整理することが求められる。

2) フィールドワークの実践

(1) 事前調査

民間信仰の調査には二つのタイプがある。①ある特定の信仰に焦点を当てて、その広がりや様態を調べ、相似や差異を抽出して、本質を究明しようとする場合と、②一つの地域のなかに存在する各種の民間信仰をすべて調べ上げようとする場合の二つがある。いずれの研究目的にせよ、調査を行うに当たって、すでに発表されている関係文献を一覧しておくことは必須の要件である(平野ほか1987:5)。

1 特定信仰の調査の場合

事前調査のあり方が調査の成否を大きく左右する。できるだけ多くの関係文献を渉猟することが必要である。調査の目的を明確にすること。どのようなことに興味をもち、何を調べようとするのか、何のための調査なのか。調査や研究の対象について、事前の知識をもつように努めること。用語の意味はもとより、かりに修験道の調査をするならば、修験道についての調査報告や研究に目を通すべき。これらの文選によって、調査研究を行おうとする民間信仰の有する意味・意義・研究水準・視点などについて、

ひととおりの理解をしたうえで調査に臨む。文献としては、県史・市町村史の民俗に関する記載や各自治体が刊行する民俗資料調査報告書などが手がかりとなる(平野ほか1987:6)。

2 特定地域の調査(民俗誌的な調査)の場合

この場合、現地調査のあり方が成否の鍵を握るが、事前調査も軽視できない。調査項目は、社会生活・経済生活・言語生活など、人間生活の全領域に及ぶ。したがって調査は調査者自身の力量に負うところが大きい。いずれにせよ当該地域の信仰に関する文献は極力目を通すことが肝心である。宗教学人名簿は調査の手がかりとなる(平野ほか1987:6-7)。

(2) 現地調査

事前調査に引き続き、現地でのフィールドワークになる。現地調査では、ジェネラルサーベイで地域の情報を概括的に知ったうえで、被調査者となる話者を選定し、聞きとりを進めていくことになる(平野ほか1987:11)。

1 地域の概括的調査:ジェネラルサーベイ

地域の有識者をたずねてアドバイスを受ける。例えば、教育委員会(文化財担当)、市町村史編さん室の担当者、郷土博物館や資料館(学芸員)などが対象となる。

2 話者の選び出し

話者は自分の力で探すしか方策はない。その際に、有力者を頼って紹介を受けるといった口コミの利用は一般的である。農山村であれば、区長・町会長・農漁協長・組合長など、都市部であれば、氏子総代・(寺の)役員などが最初の話者の候補となる。

3 聞きとり調査

話者と対面して聞きとり調査を行う。訪問日時の約束をする方が望ましい。聞きとりの際には下記に留意する。

*手土産を持参する。

*相手の気持ちが打ち解けたところを見計らって、本格的な聞きとりに入る(ノートをだす)

*相槌を適宜うつ。聞き上手になること。

- * 調査項目を作成し、聞き漏らしは現地で解決する。
- * 調査は正確でなければならない。
- * 複数の話者から聞きとりする。

聞きとった話を整理する際には、階層性と時代性に留意する必要がある。語られた内容が、その地域の特殊に属するのかそれとも普遍的なことなのか、十分に吟味する必要がある。地域社会の中で話者の置かれた立場や占める位置によって、語られる内容に差異がある。またその民俗現象が現在なお継続していることなのか、それとも過去に行われていたことなのかにも注意を払う必要がある。

4 記録用紙

カード・ノート・手帳など。

5 帰宅後の作業

調査を終えて帰宅（帰宿）したら、できるだけ早くこのノートを点検し補正をしておく。共同調査の場合、情報を共有できるようにする。

6 写真の撮影（平野ほか1987：10-22；田中ほか1987）

Ⅲ 宗教地理学の実践とフィールドワーク

Ⅱ章では、地理学関連諸科学における、宗教研究をめぐるフィールドワーク方法論について、宗教学、社会学、民俗学を事例に検討した。一方で、地理学における宗教研究をめぐるフィールドワーク方法論については、これまでほとんど議論されていないように思われる。そこで本章では、筆者自身の経験をもとに、フィールドワーク方法論にかかわる考察をしたい。これまで筆者が取り組んできた宗教地理学にかかわる研究をふりかえる形で検討を行う。

Ⅲ-1 フィールドに入る前に

1) テーマの設定

筆者が人文地理学を専門的に学び始めたのは、筑波大学大学院の地球科学研究科地理学・水文学専攻（現・生命環境科学研究科地球環境科学専攻）の人文地理学分野に進学してからである。学類（学部）で現代思想を学び、卒業後にまず宗教学専攻

に進学した筆者は、宗教社会学の立場から宗教研究を志した。当時の筆者は、天理教および天理教系分派教団における教団形成論を主たるテーマとしていたが、フィールドワークの訓練を受けたこともなく、基礎を身につけないうまま自己流の調査に終始していたため、期待した成果をあげることができなかった。この理由を大別すると、以下の3点が指摘できる。

第一にテーマ設定の失敗である。大学院生が最初に取り組む本格的な論文は修士論文作成になるが、いわゆる「時間・金・能力」の制約のもと、自分の関心や学問上の意義と照らし合わせつつ、テーマを選択することになる。いわば「手におえない」テーマを選んではいけないということである。第二に先行研究の把握および理解の不足である。とくに外国語文献のサーベイが不十分であった。したがって自分の研究を客観的に位置づけることができていなかった点である。第三にフィールドワークへの意欲の欠乏である。宗教にかかわるフィールドワークは、先にも言及したように、ある種の困難さがつきまとう。したがって、フィールドワークによる宗教研究には、技術的な面よりもメンタルでの強さや根気が重要となる。

信者への聞きとりには困難が待ち受けていた。教団本部で信者に話を伺うと、身内や自分自身の不幸や災難を契機に入信し、教団の秘蹟により艱難辛苦を救われたという紋切り型の霊験譚を聞かされる。教団の外で話を聞こうと信者の自宅を訪ねると、多くの場合インタビューを拒否された。信仰は政治信条と同様に高度なプライバシーの問題にかかわる。家族に秘密にしている場合もあれば、入信経験はあっても現在は完全に無関係の人もある。夏休み中の炎天下、関東地方の信者宅を回りながら、何度も怒鳴られて追い返されて、激しい徒労感と虚脱感にさいなまれたことは生涯忘れ得ない経験である（松井2007：191）。

続いて進学した地理学の大学院において、筆者は所属研究室スタイルのフィールドワークを学んでいくこととなった。地誌に重きおく実証主義的

学風は、年二回実施される野外実験を通して訓練される (Matsui et al. 2013)。地図を片手に観察と聞きとりをベースに地域生態を描いていく手法は、宗教学から来た筆者にとって極めて新鮮であった。とはいえ一朝一夕にフィールドワークの技法が身につくわけではない。野外実験では、農業・農村における土地利用や生活組織、都市の社会組織、住民の生活行動などのテーマについて、教員や他の大学院生たちと共同で現地調査を重ねながら、報告書に論文をまとめていった。

一方で自分自身の研究としては、宗教学で培ってきたわずかな知識と経験を、いかにして地理学の世界で活かすかに腐心していた。最初に取り組んだテーマは信仰圏研究であった。修士論文では、笠間稻荷、続く博士論文では金村別雷神社における信仰圏の空間構造を対象とした。信仰圏研究は、民俗学や宗教学では山岳宗教の信仰圏における同心円の構造が指摘されており、同様に地理学でも、主として歴史地理学において、山岳宗教集落および信仰圏の圏構造にかかわる議論が蓄積されていた。いかにして自分の研究テーマを見出すのか、自分の関心が最も重要であることは論をまたないが、一方でさまざまな制約条件のなかで、適切なテーマを選択するにはどうしたらいいだろうか。

2) 研究史の俯瞰

修士論文で信仰圏研究に取り組むきっかけとなったのは、先行研究に触れて、その世界を自分でも体験したくなったからである。筆者にとっては、岩鼻通明による一連の研究 (岩鼻1992ほか) に惹かれたといっても過言ではない。宗教地理学に限らないが、自分が取り組んでみたいテーマには必ず先達がいるのが一般であろう。先達にあこがれ、その考え方を吸収し、自分も同じ高みから世界を見渡す。学問に携わる喜びの原点でもある。しかしながら、ふと我に返ると、その先達は自分にとって大きな壁であり、ライバル (というのはあまりにおこがましいが) となる、いやライバルとして見なされるように成果を挙げなければならないことを知り、愕然とするのが通例である。

自分にとって憧れのスターが自分に立ちはだかる恐怖、その恐怖を克服するためには、勉強するしかない。要諦は、第一に自分の関心テーマについて、先行研究を網羅的・体系的かつ批判的に読んでいくこと、そして第二に、ある特定の研究対象に「どっぷりと浸りこむ」ことによって、自分自身の狭い守備範囲を徹底して作り出すことであろう。これはフィールド研究の場合とくに有効である。学生時代は時間に余裕がある。徹底してやり抜くことだろう。それによって自信も得られる。

地理学を体系的に勉強したことのなかった私は、大学院試験に合格してから入学するまでの半年間、ただひたすらに地理学界で出版された宗教にかかわる内外の文献を読むことに専念した。何せ一度捨てたも同然の人生なのだ、好き勝手にやってやろう。図書館と研究室を往復し、手首が腱鞘炎になるほど膨大なコピーをとり、1編ずつ読んでは内容とコメントをカードに整理していくという作業を入学後の夏までほぼ1年間続けた。検索方法もプリミティブであった。邦文は「地理学文献目録」と「学界展望」を手がかりに、残りは入手した論文ほかの参考文献リストをたどっていくのみ、欧文は図書館の床に座り込み、1冊ずつ目次に目を通していくという、到底今ではできない体力勝負の方法である。Progress in Human geography 誌すら偶然手にとって知った次第であった。筑波大学の図書館は幸い集中管理の全面開架式であり、地理学関係の雑誌類も比較的揃っていたので、このような方法でも少なからず対応することができた。検索ツールが発達した現在、このような方法は推奨されるものではないが、地理学の世界に早く溶け込みたかった私にとって、雑誌の顔やにおいを知ることができた貴重な体験であった (松井2007: 193)。

3) フィールドの決定

研究テーマが決まれば、そのテーマに即したフィールドの選定が必要となる。信仰圏研究の場合、対象となる宗教組織 (教団) の許可が必要となる。当該信仰にかかわる基礎的な資料として、信仰者、信仰組織の分布やその変化を押さえるこ

とが必要であり、そのためには調査許可を得ることが重要となる。むろん宗教組織側の資料閲覧許可や研究に対する協力がなければ、調査ができないというわけではない。信仰を受容した地域の側に焦点を当て、地域で得られる文書類や聞きとりなどのデータから信仰圏の分析を行うことは可能である(例えば、小野寺2005など)。しかしながら、信仰の対象(教団)と信仰を受容した地域(人)との関係は相補的であり、教団側の協力を得ることができない場合、調査を中長期的にすすめ、当該研究を自分のテーマとして育てていくには困難が大きい。

研究対象の選択においては、現実的な判断も重要である。フィールドへの距離や地縁、当該組織へのコネクション、そして調査者個人の信仰も考慮されるべきであろう。先述したように、信徒であることが研究目的を達成するうえで有効であるか否かは、単純に議論できる問題ではない。とはいえフィールドワークに入るうえでは、信徒であることが調査対象への理解度やコネクションといった点で有利になる点は指摘されよう。

流行神的な民衆宗教を扱いたい。しかも祈願内容は多様に富んでいるほうがいい。研究対象を稲荷信仰にすることに迷いはなかった。稲荷神は本来農耕神でありながら、家内安全は無論のこと、集落安全や商売繁盛や転じて航行安全といったマルチな御利益神として受容されており、信仰の担い手もそれに応じて多様である。既往の研究で蓄積されてきた山岳信仰研究との差異化を図ることもできる。あとは対象をどこにするかであった。稲荷信仰といえば誰もが知る京都・伏見稲荷がまず思い浮かぶ。他にも豊川稲荷(愛知県)や竹駒稲荷(宮城県)、祐徳稲荷(佐賀県)などが広域の信仰圏を有する稲荷神として挙げられるが、私は笠間稲荷(茨城県)を選択した。

笠間稲荷は関東では著名な稲荷神社として知られており、準広域の信仰圏を有している。そして何より居住地から近く、日帰りで調査可能であったことに尽きる。投稿論文でフィールド選択の理由をもっともらしくつけ(させられ?)るが、現住地か実家の近くで探

す場合が多いはずだ。経済的なメリットもあるが、地理学を志して日の浅い私には、思いついたらいつでもフィールドに赴ける近場にあることが重要であった。とはいえ宗教調査の場合も、相手教団(この場合は神社)の協力が得られなければ調査は難しい。神社から正式に調査許可をいただいてようやくフィールドが決定した(松井2007:193-194)。

研究テーマにせよ、研究対象(フィールド)にせよ、一度決めたら安直に変更しない方がよい。研究の入口は誰にとっても不安がつきまとう。初学者であればなおさらである。調査を開始したとき、聞きとりを立て続けに断られたり、期待した成果が思うようにならなかったりすると、「もしかしたら、テーマ(あるいは研究対象)が悪いのか」と怯んでしまうことがある。そこで撤退しては負けである。もちろん本当に(研究を続けていくことが)ダメな場合もあるが、研究の入口で待ち受ける小さな坂を登れないくらいでは、次のテーマに取り組んでもすぐに挫折するのが落ちである。一度決めたら、原則としてテーマは変更しない。やりぬくことが大切であろう、とこれは自戒の言葉でもある。

Ⅲ-2 フィールドワークの実践

1) フィールドに通いこむ

フィールドが決まれば、あとは「通いこむ」ことが肝要で、書齋で悩むのではなく、遠慮なく「フィールドに聞く」ことが大切である。面会の予約(アポイントメント)が取れていない、調査票が練られていない、何から手を付けていいかわからない…。こうした時もまずはフィールドに行って、極端に言えばぼんやりしているだけでもいい、フィールドと時間・空間を共有するだけで、みえてくることもある。笠間稲荷の研究に入ったとき、どうにも調査の方向性がみつけれないときがあった。このとき取りかかったのが、門前町の土地利用調査であった。その時の研究テーマにおいて、門前町の土地利用は必ずしも必要な資料ではなかった。フィールドに出たら何か、わずか

でもいいから成果を得て帰りたい、その思いからとりあえず始めた土地利用調査であった。門前町の景観をじっくり観察し、ときに饅頭を食べながら地図を片手に歩いていると、仲見世の方に「何をやっているのか」と声をかけられることがあった。その方と話をしているうちに、仲見世における笠間稲荷講の様子や門前町の有力者、昔のことをよく知る古老といった、その後の研究に役立つ情報がいろいろと集まってきた。まさに「田舎の読書より京の昼寝かな」の心境であった。

フィールドに通いこむなかで、研究の道筋がみえてくる。さらには道を進んでいくための方法が浮かび上がる。このことはフィールドワークを経験したものであれば、多くの方が首肯するであろう。筆者の研究は、仮説検証的な枠組みで始めたものであったが、こうした仮説が調査のなかで覆る瞬間がフィールドワークの醍醐味であろう。

調査の苦勞と試行錯誤の様子は、下記の文章に描写されている。

私の研究では笠間稲荷の信仰圏を定量的に把握する必要があった。そもそも何を指標にして信仰を把握したらいいのか。一番確実なのは神社への参拝者を把握することであるが、社頭で拝礼している一般の参詣者や偶発的に訪問した観光客などを信仰者のカテゴリーで語ることは適切だとは言いがたい。神社の記録簿にある個人崇敬者に関する資料（もちろん個人名・企業名、電話番号等、個人情報に関する情報はすべて除いた上で）を閲覧・筆者させていただき、これらの定期的に昇殿してご祈禱を受けている人たちに「篤信崇敬者」と名づけた。個人単位での信仰者とは別に、笠間稲荷では集団で参拝している講のグループが数多く組織されている。講の名称、所在地、人数、参拝月日などについてのデータも閲覧・筆者を進めた。私の研究では信仰圏の歴史的な形成過程よりも現代的な様相と空間モデルに関心があったため、最新のデータから筆写を進めていった。信仰者については高度なプライバシーにかかわることであり、個人情報の取り扱いには細心の注意が必要であることはいまでもないが、同時に神社にとっても経営資源の根幹にかかわるデータであ

り、調査者との信頼関係がなければ調査が進めることはできない。反対に過去のデータに関しては、神社所蔵の資料を十分に活用することができなかった。明治時代と昭和戦前期の2時点における資料を入手するにとどまり、残りは神社境内に残された奉納額や絵馬、石碑・石塔などに記載された個人名、講名、所在地などを手がかりに空白を埋めていった。それでも明治時代中期に流行神的に信仰が流布していく様子がわかってきた。

こうした個人・集団を問わず神社に定期的に参拝する人たちを先に用いた篤信崇敬者と名づけたが、笠間稲荷の信仰者はこのカテゴリーだけで把握するには不十分であることも事実であった。笠間稲荷では年間を通して、さまざまな祭礼が営まれているが、歳旦祭や大祓など全国の神社で共通する祭礼もあれば、講社大祭や献穀献繭祭、御分霊祭などといった独自のものもある。献穀献繭祭は笠間稲荷に繭や穀物を献納する農家による祭礼であり、この農家を「産物献納者」と名づけた。御分霊祭は笠間稲荷の御霊を分霊として勧請した人たちによる祭礼であり、この人たちに「分霊勧請者」と命名した。こうして最終的には、「信仰者を大きく3つに分類することになったが、これは資料の筆写と後日の入力作業が終わってからの作業仮説から生まれてきたものである。ちなみにすべての祭礼の担い手を教えていただき、リストアップしていったが、結果的に重複があったり、一過性のもので信仰の分布を把握する上で不必要と判断したものが相当数あった。まさに試行錯誤の作業の連続であった（松井2007：194-195）。

2) フィールドワークの実践

調査内容は試行錯誤の連続であったが、調査の手法自体は、神社にての資料筆写および関係者への聞きとり調査と、いたってシンプルであった。神社資料の収集は、前段落の引用に述べられている通りであり、神社のご厚意でみせていただいた参拝にかかわる資料を筆写させていただいた。もちろん個人情報にかかわるプライバシーの保護については万全を期したことは言うまでもない。こうした神社資料の筆写は、その後行った金村別雷神

社や一言主神社の研究においても、基礎的な資料として、収集につとめた。神社所蔵の資料のみならず、講の関係者や個人宅に記録された参拝記録や講碑や奉納額などに残された文書等も重要な手がかりとなる。ただし火災その他により、古い記録が失われている場合や新宗教教団のように、かつて厳しい宗教弾圧があり、公開された歴史と事実との間に大きな離れがある場合もある。筆者自身の経験ではないが、日本の新宗教にかかわる重要な教団資料は、アメリカ議会図書館（The Library of Congress）にいかなければ閲覧できないという。

聞きとり調査については、筆者自身の経験を地理学の聞きとり調査法として、まとめたのが以下の文章である（松井2011）。宗教研究を対象としたフィールドワークにおいても基本的に合致する。

第一に、話者を選ぼう。聞きとりに限らず、調査には何らかの目的があるはずだ。聞きとりの場合、話者が調査目的にかかわる直接的な情報を知っているとき、とくに有用である。話者自身もしばしば、無意識のうちに混同することがあるし、また聞き手に誠実に応えようとするがあまり、推測的なことも事実として語ってしまうことも少なくない。もちろん間接的な情報が無意味というのではない。話者の幼少時の話、地域の概況などについて話を聞くとき、伝聞や推測が含まれるのは当然のこと。聞きとりによって得られたデータは、その内容の真贋も含めて精査が必要である。可能な限り当事者に尋ねよう。それが難しい場合、複数の人にあたり情報の精度を高めていくことが肝要となる。

第二に、事前に入念な準備をしよう。自分の知識の限界が聞きとりの限界だ。知らないことを聞き出すのが聞きとりの目的であるが、その対象について知識が不足しては、満足な聞きとりをすることはできない。知らないことを聞き出すことがいかに難しいか、聞きとりを一度でもしたことがある読者ならおわかりだろう。まずは対象について、文献でもインターネットでもよい。事前に勉強しておこう。聞き手側の予備知識が乏しい場合、相手から引き出せる情報は非常に

限られたものとなるのだ。また事前の準備として、聞きとり項目を整理しておくことも有効である。聞き漏らしのないように、必要な項目はあらかじめノートにまとめておこう。そのためにも事前に準備し、ある程度の仮説をもって聞きとりに臨むことが望ましい。仮説がないと、ぼんやりと聞いてしまうことになりかねない。仮説とはあくまでも「仮」のもの。聞きとりを重ねながら、修正していけばよい。当然のことながら、聞きとり時の服装や言葉遣い、態度も成果に大きく関わる。聞きとり調査には、厳密な意味でのドレスコードなどは存在しない。しかしながらTPOをわきまえて、然るべき姿で聞きとりに臨もう。

第三に、聞きとりは情熱である。何よりも知りたいという欲求を強く持つこと。その熱意こそが、人の心を動かし、豊かな情報を引き出す糸口を与えてくれるのだ。話者が好んで話をしてくれるケースは少ない。気の乗らない相手、忙しい相手に対して、有効な聞きとりをするためには、何よりもまず、自分自身が知りたいという強い欲求を、熱意をもって示すことが必要である。最初は警戒心をいだいていた話者も、聞き手の熱意を感じ取ってくれば、次第に心を開いてくれるはずである。聞きとりには、我慢強さも必要だ。相手の話に頷きながらじっくりと耳を傾けてみよう。世間話のなかに重要なヒントが隠されていることもある。知りたい情報を話者から最大限聞き出すためには、話者と上手にコミュニケーションを図ることが大切なのだ。

最後に、人間は忘れる動物である。聞き取ったことはその場でメモに書きとろう。その際に、「わかったふり」をしてはいけない。あいまいな点、不明な点は必ずその場で聞きなおそう。早合点は聞きとりの大敵である。メモを取ることに不安な人は、ICレコーダー等で録音させていただくのも一手である。また帰宅したら、その日のうちに走り書きの聞きとりメモをノートに整理しよう。文章化（図表化）しておくことが大事である。記憶ではなく記録に頼ろう（松井2011：177-179）。

宗教調査の聞きとりで難しいのは、個人の実存にかかわる信仰の具体的内容にかかわる質問であ

る。このことは、宗教学や社会学における調査法で指摘されているように、宗教が人間を超越した聖なるものと究極的なかわりをもつこと、その結果、人の生死にかかわる事象について扱うことに起因する。筆者も別の研究において、信徒の方に門前払いを食らったことは何度もある。また教団で参与観察を行う際にも、なかば入信儀礼を強要されることもあった。調査において、「ミイラ取りがミイラになる」といったことは重々気を付けなければならない。教員として学生指導としてさせる場合には、まさにフィールドワークの安全・安心といった面からもとくに留意する必要がある。ただし個人的な経験からいえば、地理学の立場から宗教研究を行う場合、宗教のもつ実存的な側面にかかわるシーンは少ないものと考ええる。

Ⅲ-3 フィールドワークを成果にまとめる

1) ディスカッションと論文執筆

フィールドワークは研究の目的ではない。あくまでも研究手法の一つであり、最終的な目的は、研究成果をまとめることにある。“publish or perish”は調査と研究をめぐる常套句だが、とくに宗教にかかわるフィールドワークの場合、人とのかわりと無縁ではいられない。多くの人にお世話になったことを考えると、感謝の意を示す最善の方法は、研究成果を論文という形で発表することであろう。研究成果をまとめるには、ディスカッションは欠かせない。同じ業界の研究者仲間だけでなく、関連学会の研究者や研究者以外の人びと、信徒や教団関係者も含めたさまざまな人たちとのディスカッションを通して、研究はまとめられていく。学生であれば、セミナー（ゼミナール）がまずその場となろう。年齢や経験の上下は関係ない。忌憚のない意見を交わす場としてのゼミでの発表は、フィールドワークの成果を整理し、次のステップに進むための道標を提示する。

（筆者の学生時代）ゼミは厳しく、今、学界で活躍されている先生（先輩）方もこっぴどくやられていた。人間サンドバッグといおうか、「同じ釜の飯を食った仲

間」意識が醸成されるセレモニーでもあった。当時はそんなゼミを楽しむ余裕もなく、発表の都度戦々恐々としていた。研究対象をどのように選び、分析するのか、観察、聞きとりで得られた事象をどのようにデータ化し、図表として表現していくか、研究の強み（オリジナリティー）をどこに求めるのか、テーマの設定から論文の完成まで、うるさいほど議論を重ねると、どんな凡庸な人間でも研究のイロハだけはわかってくる（松井2007：196）。

ゼミで議論しては、フィールドに戻っていく。教室とフィールドとの往復が何よりも大事であることは、宗教地理学においても同様である。

2) 研究成果の還元と反省

お世話になったフィールドに成果を還元することも重要である。とはいえ、これはなかなか難しい。学会で発表し、成果を学術論文の形で公刊したとしても、それがフィールドへ、ひいては社会への還元になるとは限らない。ただし趣味としての研究ではなく、研究資金を得ての調査であるならば、成果の還元と社会貢献を意識することは必須であり、こうした意識は、研究のモチベーションを保つ上でも大事である。苦労してなんとか論文をまとめても、反省と課題は必ずつきまとう。

信仰圏の既往の研究成果と接合する形で私は笠間稲荷信仰圏を3つに分類することが可能であると考え、それぞれの圏域のもつ空間的性格を明らかにしたいというのが研究目的であった。各圏域から代表的な人物（講社）を複数選び、その人（講社）の祈願内容、成立過程、参拝形式と頻度、奉納品、勧請神の有無などに関してデータ化を進めていくと同時に、話者の語りそのものを再現したいと考えていた。ところが話者の分布域は広く、思うようにサンプルを収集することができなかった。第1次信仰圏で10人、第2次信仰圏からは8つの講社、第3次信仰圏では5つの講社と3人の分霊勧請者から聞きとりを行ったが網羅的とはいええず、事例としての代表性にも疑問があった。聞きとりの成果は信仰圏の圏域区分に関する自分の仮説を補強する

ものであったし、納得もできるものであったが、論文として考えたとき、単発的な聞きとりをデータとして組み込んでいくのは危険に思えた。一方で網羅的に信仰者のみなさんに聞きとり（アンケート）をする時間的な余裕もなかった（松井2007：197）。

ここでは、こうした反省を通してこそ、フィールドワーカーとして成長するのだと居直っておこう。

IV おわりに

本研究では、宗教研究におけるフィールドワークの方法・実践・課題について、関連諸学（宗教学、社会学、民俗学）における既往研究の解題を通して整理するとともに、筆者自身のフィールドワーク経験を通して、宗教地理学におけるフィールドワークの技法について検討してきた。ここで参照してきた関連科学は、いずれも固有のディシプリンをもつ学問であり、それぞれの学問的課題から宗教現象にアプローチする。地理学もまた宗教研究を担う一分野であり、とくに方法論としてフィールドワークを看板に掲げる学問でもある。しかしながらこれまで、宗教研究のフィールドワークに関する体系的な議論はなされてこなかった。本研究はその意味で小さいながら意義をもつものと考えられる。

本研究で明らかになった点を簡潔に整理するならば、以下のとおりである。フィールドワークに取り掛かるうえでの前提条件として、次の3点が指摘された。第一に、研究対象にはさまざまな制約があり、調査者の自由にならない方がむしろ一般的である。したがって調査の協力をいかにして得るのか、そして協力が得られた対象から適切な研究対象を選ぶことが肝要である。第二に、研究対象について、可能な限り事前に資料を収集し、理解に努めることである。当該宗教にかかわる知識を有するだけでなく、研究報告に目を通すことが求められる。そのうえで、学問的な課題（研究の意義づけ）を意識しながら、フィールドワーク

に臨むことが期待される。第三に、研究対象と適切な距離感を保つことである。宗教現象は人間の実存にかかわる現象であり、調査者と被調査者との間には、非常にナイーブな状況が生じることがある。被調査者に対し、共感的な立場で接するとともに、冷静かつ客観的に（あくまでも調査者として）ふるまうことが重要である。以上3点は、地理学にも関連諸学にも共通してみられる方法論的要諦であり、さらに言えば宗教以外を研究対象とする際にもある程度敷衍することができるだろう。

フィールドワークの方法としては、事前調査（文献収集など）、現地調査、研究のまとめと成果の発表というプロセスについて、学問間の差異はみられない。フィールドワークの技術に関しても同様であった。フィールドワークは最終的には、経験がモノをいう。学者としての能力を磨きつつ、場数を踏んでいくことに尽きる。

筆者の研究を簡単に振り返ると、この20年間あまりで大きく次の3つの問題関心に沿った研究を進めてきた。最初に取り組んだのが、「宗教の空間構造を考える」研究であり、Ⅲ章で事例とした笠間稲荷や金村別雷神社信仰圏の研究が該当する。これらの研究は、すでに民俗学、宗教学、歴史地理学で構築されてきた信仰圏の空間モデルがあり、このモデルを援用・改変しながら、空間構造の意味を問おうとする演繹的な研究であった。フィールドワークの中心は、当該宗教組織（神社）における資料筆写および代表者への聞きとりであった。

続いて取り組んだのが、「宗教景観の意味を考える」研究であり、長崎の教会群と宗教ツーリズムの研究がこれに該当する（松井2013b；Matsui2013）。宗教を地理学的な視点から分析するとき、巡礼とツーリズムの視点は重要である。ツーリズムという切り口で宗教をみると、宗教資源の観光資源化、それをめぐるさまざまなアクターの相互作用、そして資源化にともなう宗教景観の意味づけの変化、さらには人びとの暮らしに与える影響など、研究の題材が与えられた。そこ

では宗教者（神父）、信徒、観光客、観光関連業界、行政など、さまざまな属性の人たちへの聞きとりを行った。文章化することができない情報も数多くあり、研究・調査がもたらす影響とプライバシーについても深く考えさせられた。宗教のフィールドワークの場合、統計資料というものがほとんど存在せず、行政が積極的に関与することはないため、筆者はそれまで市役所等での聞きとりや資料収集を重んじてはいなかった。ツーリズム研究の場合、行政はその担い手として重要なアクターであり、資料収集の便宜のうえでも重要な機関であることを改めて経験した。

さらに現在取り組んでいるのが、「宗教を通して地域社会を考える」研究であり、宗教組織を通して地域社会の特性を明らかにしようとする試みである（卯田ほか2012；Uda et al.2013；卯田ほか2014）。大学院の野外実験で調査を行った黒部川扇状地や常総地域において、聞きとり調査をもとに宗教を切り口とした地誌的研究を実施した。

ここでは一連の調査・ディスカッションを終えたあとで、質問票を作成し、被調査者記入型のアンケート調査を実施した。行政あるいは地域の有力者の協力を得て、実施したものであるが、アンケート調査が宗教研究においてどこまで有効であるか、今後の論文化をとおしてさらに検証していきたい。

フィールドワークは研究の目的ではなく、一つの手段である。研究目的に合致した調査となることによってはじめてフィールドワークは意義をもつ。本務校の場合、フィールドワークの実施には、倫理委員会の事前承認が必要になるなど、フィールドワークをめぐる環境は刻々と変化している。フィールドワークの重要性は論をまたないが、これを伝家の宝刀であるかのように考えることもまた誤りである。この点を十分に認識したうえで、有効な研究方法として今後もフィールドワークを通して、宗教研究に取り組むことになるだろう。

本研究を遂行するにあたって、平成22～25年度科学研究費補助金（基盤研究A）「フィールドワーク方法論の体系化—データの取得・管理・流通に関する研究—」（研究代表者：村山祐司）の一部を用いた。

【文 献】

- 池上良正（1996）：宗教現象のフィールドワーク。井上順孝・月本昭男、星野英紀編『宗教学を学ぶ』有斐閣選書、125-143。
- 磯岡哲也（1994）：社会調査を通してみた宗教。井上順孝編『現代日本の宗教社会学』世界思想社、197-229。
- 井上順孝・孝本 貢・塩谷政憲・島蘭 進・対馬路人・西山 茂・吉原和男・渡辺雅子（1986）：『新宗教研究調査ハンドブック』雄山閣。
- 岩鼻通明（1992）：『出羽三山信仰の歴史地理学的研究』名著出版。
- 上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田 登編（1987）：『新版 民俗調査ハンドブック』吉川弘文館。
- 小野寺 淳（2005）：伊勢参宮における講組織の変容—明石市東二見を事例に—。歴史地理学、47(1)、4-19。
- 卯田卓矢・益田理広・金 錦・細谷美紀・久保倫子・松井圭介（2013）：入善町道市地区における浄土真宗の講組織と維持要因：地区の社会構造に着目して。人文地理学研究、33、67-86。
- 卯田卓矢・石坂 愛・上野李佳子・矢ヶ崎太洋・松井圭介（2014）：常総市大塚戸町における一言主神社信仰の特性。地域研究年報、36、139-167。
- 浦西 勉・古家信平・松崎憲三（1987）：民俗調査の方法と基礎知識 8 信仰。上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田 登編『新版 民俗調査ハンドブック』吉川弘文館、134-159。
- 岸本英夫（1961）：『宗教学』大明堂。
- 島蘭 進（1987）：習合宗教。圭室文雄・平野榮次・宮家 準・宮田 登編『民間信仰調査整理ハンドブック 上・理論編』雄山閣、169-181。

- 田中正明・長谷川匡俊・新城美恵子・平野榮次・北村皆雄 (1987) : 民間信仰調査の方法. 圭室文雄・平野榮次・宮家 準・宮田 登編『民間信仰調査整理ハンドブック 下・実際編』雄山閣, 51-102.
- 圭室文雄・平野榮次・宮家 準・宮田 登編 (1987) : 『民間信仰調査整理ハンドブック 下・実際編』雄山閣.
- 平野榮次・大矢良哲・水谷 類・茂木 栄 (1987) : 民間信仰調査上の心構えと手順. 圭室文雄・平野榮次・宮家 準・宮田 登編『民間信仰調査整理ハンドブック 下・実際編』雄山閣, 2-50.
- 松井圭介 (2003) : 『日本の宗教空間』古今書院.
- 松井圭介 (2007) : 宗教の空間構造を知る : 信仰者はどこにいるのか. 梶田 真・仁平尊明・加藤政洋編『地域調査ことはじめ-あるく・みる・考える-』ナカニシヤ出版188-198.
- 松井圭介 (2011) : 聞きとり調査・アンケート調査の方法. 上野健一・久田健一郎編著『地球学調査・解析の基礎』古今書院, 177-181.
- 松井圭介 (2013a) : 宗教の地理学. 人文地理学会編『人文地理学事典』丸善出版社, 300-301.
- 松井圭介 (2013b) : 『観光戦略としての宗教 : 長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会.
- Matsui, K., Kaneko, J., Hashimoto, A. and Oishi, T. (2013) : Fieldwork Education Practice in Graduate Schools: A Case Study on Human Geography and Regional Geography Classes at the University of Tsukuba. *Tsukuba Geoenvironmental Sciences*, **9**, 21-29.
- Matsui, K. (2013) : *Geography of Religion in Japan: Religious Space, Landscape, and Behavior*. Tokyo: Springer.
- Uda, T., Mashita, M., Hosoya, M., Jin, J., Kubo, T. and Matsui, K. (2013) : Discussions on the regional characteristics of the Jodo Shinshu (True Pure Land Buddhism) association in the Kurobe River alluvial fan – A case study of Doichi, Nyuzen Town. *Tsukuba Geoenvironmental Sciences*, **9**, 3-11.

英文タイトル

Discussions on Methodology of Fieldwork on Religious Studies

MATSUI Keisuke